

# 令和2年度北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議

## 第1回 調整会議 会議録

### 1 開催日時

令和2年7月31日（金）18：30～20：00

### 2 開催場所

総合保健福祉センター2階 講堂

### 3 出席者等

#### (1) 構成員

安藤構成員、中村構成員、長森構成員、橋元構成員、渡邊構成員

#### (2) 事務局

保健福祉局長、総合保健福祉センター担当部長、地域福祉部長、認知症支援・介護予防センター所長、長寿社会対策課長、地域福祉推進課長、地域支援担当課長、介護保険課長、介護サービス担当課長、健康推進課長

### 4 会議内容

次期北九州市いきいき長寿プランの基本的な考え方について

### 5 会議録（要約）

**資料1**、**資料2**に基づき、事務局より説明。

#### **各分野別会議での意見について**

(代表)

各分野別会議での意見等補足はないか。

(構成員)

コロナにより、デイサービス等に影響が出ている。事業所によっては、休んでいる方に対して、在宅リハビリの発信をしているところもある。こういう情報は、事業者にしっかり発信したほうがいい。

(代表)

介護の人材育成をどう進めていくか、定例の会議等ではいつも話題になっており、外国人等の対応を今後どういう方向性で進めるか大きな課題になってくる。

(構成員)

介護の人材育成については、学校教育もあるし、学校教育で学んだことを持って帰る家庭でも家庭教育があり、地域での教育もある。学校、教育委員会にも発信していただきたい。

(代表)

介護人材の不足に対して、北九州市で進められている介護ロボット等をどう導入、利用していくのかについても、具体的な方向性を検討していかなければいけない。

(構成員)

地域包括の会議について補足する。

・権利擁護関係は、成年後見制度等に関連する事業の推進、関係機関の連携が重要。制度を正しく広げる、多くの人に理解してもらうための啓蒙啓発、お互いに学ぶ場を作ることが大切。

・虐待について報告があり、北九州市では一定の成果が出ているという意見があった。今後も、施設職員に対する研修の充実や、家族支援も大きな課題になる。また、虐待は他人ごとではなく誰もがそのリスクを持っているという認識を持つべきであり、同時に虐待を起こした人のフォローも合わせて考えておくべきである。人材難でもあるので、人をどう支援していくかを考えていかなければならない。

・地域包括支援体制については、4助の中で、「自助」「互助」の重要性が強調されている。4助は別々ではなく、ひとつのものとして、地域の中でどう展開するかが地域包括としてのポイントになる。その際、地域の実情に応じて多様な活動の場、寄り合える場が必要なこともわかるし、今まで北九州市が行ってきた施策の中にも、コーディネーターの配置が位置づけられていたが、考えておかなければならないのは、地域の一人一人は多様な価値観、多様なライフワークを持っているという事実。今後は、どうやって地域がつながる、まとまるコンセプトを作るのか、ますます大きな課題になる。少なくとも私事（わたくしごと）でないと接点を持たない世代が目の前にいて、私事というものをどうやって引っ張り出してくるのが重要。

・コロナの影響で、我々はこの数か月の間に、直接会わなくも会う、空間を飛ぶことができる、そういうものを獲得した。今後のつながり方の形について、地域で会ってという従来のつながり方だけでなく、これからの地域を考えると意識が必要。

・在宅医療・介護の連携については、そこに歯科の問題も入ってくるが、「とびうめ@きたきゅう」の継続性を維持するための体制、あるいは、裾野を市民にどう広げるが大切。

・地域ケア会議については、専門家だけではなく地域の世話役を担っている人たちにもどう参加してもらうかが課題。また、本当に支援が必要な人あるいは何か支援が必要かもしれない人などグレーなところをどう支援していくかというときに、情報網として重要性を持っている。

・全体にかかる部分として、災害時や新規の感染症等が現実としてあることを考えると、いわゆる ICT やコミュニケーション情報のネットワークシステムを高齢者だから難しいという発想はもうやめたほうがよい。大変ではあるが、どうやったらできるかが重要。介護ロボット等のところでも検討いただき、システムづくりが早めにできればよい。

・広い観点でいうと、離島の介護、地域の考え方や文化の差、あるいは世代間の問題もいろいろな角度から検討していかなければならない。どこかに近所迷惑にはなってくれるなという思いや、助けてもらうことに罪悪感があったり、家族に迷惑をかけるという思いがあったり、そういった考え方、文化的なものも含めてこれからの地域が考えていかなければいけない。

(代表)

過去の成果を評価して、次に結びつける重要性、ただ目標に向かってではなく、いろいろな事業を正確に評価、成果も含めて見直し、新しいものを作るべきであるという内容だと理解している。

従来、在宅医療と介護の連携推進に関する分野別会議があったが、今回、この会議は別枠ということになっている。何かご意見があれば。

(構成員)

北九州医療介護連携プロジェクト会議で検討を進めているが、医療介護の現場と職能団体、行政がこれほど一体になって進めていこうという取り組みは今までない。「とびうめ@きたきゅう」ができたので、これを進めることにより、医療介護の連携を進めていきたい。現在は、医療職に限られた情報提供になっているが、今後の状況を見ながら、誰が情報を閲覧できるのかを含め検討していきたい。

(構成員)

権利擁護について尋ねたい。虐待の通報について、ある程度浸透してきているとは思ふ。しかし、福岡市のように権利擁護センターが北九州市にはないと思う。北九州はどこがどう取り組んでいるのかよくわからない。認知症の方の相続問題や権利擁護は取り組んでいかなければならないと思う。

(事務局)

成年後見制度の支援センターについては、昨年10月1日に、福岡県で最初の中核機関として、北九州市が設立したところである。

(構成員)

北九州市はセンターはないと市長の過去の答弁で今後検討していくというような答弁をしたと聞いているが。

(事務局)

名称の問題はあるかもしれないが、成年後見制度の利用促進のための中核機関ということで、いろいろな機能を持たせたものを昨年10月1日に設立している。そこで相談や後見人の支援等いろいろな機能を持たせている。

(構成員)

施設に家族が弁護士を連れてきて、認知症のある方にサインをさせた等もめるケースがある。どこに相談すればよいか。

(事務局)

ウエルとばたのなかに社会福祉協議会がやっている権利擁護の市民後見センターがあり、ここですべてではないが、財産管理を一部できるような機能を持っている。権利擁護センターということで一般社団法人「みと」がある。中核機関はこの「みと」に業務委託しており、権利擁護に関してはこの2つのセンターがある。財産に関しては直接というのは難しい面があるかと思うので、法律相談等を利用いただくことになると思う。

(構成員)

コロナの影響で、寄り添う、つながる、支え合いが行いにくくなっている。認知症の方には、外部の刺激が重要だが、そこが減っている。認知症の病状を進行させないために、いかにやっていくかが重要。

また、高齢者、認知症の方に、これからデジタルスキルを上げるというのは非常に難しい問題。

(代表)

介護サービス事業、介護予防教室に携わっている方が、健康づくり介護予防等で、参加した高齢者を終了後つなげる先が見えないという発言がされている。実は今、いたるところでOB会やOG会が構築されている。まだシステム化されていないところがあり未熟なところはあるが、周知や連携が徹底できていないことがうかがえる意見である。

#### 次期プランの基本的な考え方について

(代表)

事務局から次期いきいき長寿プランの基本的な考え方についての案が出されている。

これまでの目標と大きく変わっていないが、基本目標で「共生のまちづくり」とある。前はこう言った言葉は使われていない。「共生」の中には様々な意味が含まれている。単に障害の有無等でなく、老若男女すべてを含めて、「共生のまちづくり」である。さらに特徴的だと思うのは、前は、「人生90年時代へ備える」が、今回は「人生100年時代の到来」と打ち出している。この点について事務局の思いがあれば

(事務局)

人生100年時代について、シンボリックな表現かと思う。たった3年で10年増やすのかという意見もあるかと思うが、人生100年時代がもう来ていることを示したいため、この表現を使用した。また、いきいき長寿プランと同時に、北九州市地域福祉計画が策定に向け検討しているところ。この地域福祉計画が上位計画という位置づけになっており、地域福祉計画でのキーワードから共生のまちづくりと設定した。

(代表)

共生のまちづくり、新しいようで古い、古いようで新しい言葉だと思う。

基本目標に対して他に意見はないか。

(構成員)

基本目標の共生というキーワードはまさに時代に合っている。いわゆる高齢者の問題も子どもの問題も全部つながってる。地域が関係しているということが非常に率直に出ている。ただし、共生を使う以上は、施策を打つ際に横断的でなければならないということを同時にはらんでいるという認識が大事。

(代表)

また、社会参加という言葉。ICF（国際生活分類）で使用されている用語で厚労省もよく使っているが、北九州市の中ではあまり使われてこなかった。今回初めて使っている。今の厚労省を含めた流れにマッチすると考える。

また、「コミュニティ」という言葉について、あえてコミュニティとするなら特徴的なものが打ち出されているのかなと思う。コミュニティとは、地域よりも、もっと小単位の意味にするためかと読んだが。

(事務局)

コミュニティは地域性もあり、単一的なものではないということが言える。ニュアンスとしては、地域づくりを進めるということ。

(構成員)

今、コミュニティづくりとなると、今までのコミュニティはどうなるんだと思う。新しくコミュニティをつくるのはいかがなものか。

(事務局)

北九州市の場合、三層構造という地域づくりの時代からきており、表現としてはコミュニティづくりと書かせていただいているが、今までの既存のものを崩したうえで新しいものを作るという意味ではなく、さらにブラッシュアップという意味を含めて、今までの取り組みを基礎にしてその上にさらにというイメージでご理解いただきたい。

(代表)

コミュニティというのは、今回こういう意味合いを持って使うということが周知されれば非常によい。ただ、安易に使うのは誤解をまねいてよくない。いま三層構造という言葉があったが、行政の若い方でも、北九州市の三層構造を知らない人が増えていると感じる。

(構成員)

都会もあれば、田舎、山の中も、漁村と既にいろいろなコミュニティがある。それぞれのコミュニティをもう一度泥臭く出して再生して作るべき。医師が一番高齢者のコミュニティをわかっていると思う。

(代表)

支え合うという部門。単に高齢者と若い人だけではなく、いろいろな多面的なもの。その中に4助というものが出てくる。一般的には、自助の次に公助と理解されがちであるが、一番大切なのは、互助という考えが今後広がっていかねばいけないと考える。

(構成員)

「共生」という言葉と、高齢者と家族、地域がつながり支え合うまちの具体的などころの関係は非常に密であると感じる。相談しやすいということはどういうことか、複合的な課題が地域にあるというのはどういうことかという、高齢者という一つの問題だけではなく、そこに障害がある方、あるいは何らかの支援が必要な方、家族の問題、子育ての問題が複合的にあるところを、相談しやすいという言葉を持って、新たに窓口をもう一度整理するのかどうか。

(代表)

誤解がないようお願いしたいのは、このいきいき長寿プランというのはたくさんある計画の中の一つであり、このプランの中にすべて織り込むということではない。ただ、入れていたほうが良いという項目は入れておくべき。ここでいう認知症だけでいいのだろうかということも必要かもしれない。本人だけではなく、周囲を取り巻く家族を含めた支援を考えないとだめである。平成の初めころ、認知症を支える家族の会というものを北九州市で率先してやられた時代もある。家族介護者への支援というのも非常に重要な項目である。

住みたい場所で安心して暮らせるまち、住みたい場所とは。地域包括ケアの中に医療介護、生活支援、介護予防、その中核にあるのが住まいとある。この住まいというのは単に自分の家ではなく、いろいろなバリエーションがある。そのひとつに施設等もあり、ひっくり返して住まいという言葉を使っている。いろいろな「住まい方」があり、自分の家、自宅が一番いいとは限らないことも含めて。この住みたい場所というのはそういう意味が含まれている。

実際に、医療・介護の連携が具体化し、各地域でモデル事業等、いいことをやっていることも多い。共有されないままのことも多い。地域支援体制の強化、連携強化にもつながってくる。そういう情報が地域ケア会議の中にも出せるようになれば違ったものが出てきて、地域ケア会議が専門職だけの集まりで治療方針が決まったり、ケア方針が決まったりするのではなく、その人の本当の生活支援が何かということが議論できるのではないか。生活支援であるから、多職種がどうしても連携しないといけない。

介護人材の育成については、専門職の立場からいけば、キャリアアップあるいは効果的な研修は各専門団体が行き、行政がそれに対してどう支援していくかのほうが必要。

(代表)

次に介護サービスのところ。このなかに北九州の介護ロボット等の項目も挙げておくべきではないか。今までずっと行って積み重ねてきているわけなので。

次に、権利擁護、虐待防止の充実強化のところ。施設等における虐待防止の取り組み、通報をためらわない仕組みづくり、先ほど構成員の方からあったが、まだまだ十分な対応がされていない場面が見受けられる。

(構成員)

権利擁護のところ。今ビジネスモデルになってきつつあり、心配しているが、不動産業者が認知症の方の家を押さえるとか、そういった実態を早く調べた方がいいと思う。

(代表)

安心して生活できる環境づくり、高齢者のデジタルスキルという言葉にひっかかったが、いろいろなものの操作等を含めていうという意味であろうが。

(構成員)

「高齢者のデジタルスキル」我々は理解できるが、高齢者には理解が難しいのでは。

(代表)

これまで目標は、3本柱だったが、プラスアルファということで感染予防と暮らしの両立～With コロナの取組～をあげている。

コロナは、ひとつの具体例を挙げただけでコロナ対策だけではない。この中に災害等を含める方が望ましいのではないか。単に感染症の問題だけではない。幸い北九州市には大きな災害はないが、土砂崩れや河川の氾濫というのは現実的に起こっており、そういったことを含めた対応ということでくくったらどうだろうか。

(構成員)

迷いはあるが、コロナの問題を全部のところにかけて、計画自体がすごく重い感じがしてしまう。計画というのは何年間も見通しながらということを見ると、災害としては、緊急時対応として抑えなければならないし、今回のように4つ目のところに置いて、各3つのなかでは、それを意識しながら書いていくのが適切ではないか。

(構成員)

最後のところは中村構成員と同じ考えである。

介護サービスの充実の人材確保については、元気な高齢者の活用という部分もあるが、医師会として在宅医療を今後推し進めていくうえで、今まで在宅医療の研修会というのが、在宅医療を専門にしている医師に対しての研修が多く、一般の慣れていない医師がそこに入り込んでいくというのは非常にハードルが高かった。

在宅医療の充実のため、国民へのアンケートで自宅での看取り希望があり、今現在、病院死が8割ほどだが、施設も含めた形で、非病院死の割合を増やせる方向にもっていきたい。そのために、誰もが参加しやすい在宅医療に関する研修会というものを行い、少しでも在宅医療に携わる医師を増やし、人材確保をやっていこうと考えている。

(代表)

在宅医療の重要性、方向性、質の保証も組み入れていった方がいいのではという意見。全体はもうそういう方向に向いているということだと思う。

(構成員)

来年から3年間の計画だが、コロナ以外の感染症が流行ることも考えられる。後から見たときに、あの時はコロナだったのかと、「感染症に対する取り組み」という表現もいかもしれない。感染症と災害に対する対応をどうするのかというのは、どの会議でも注目されているので、そのあたりを反映させていただければ。

(代表)

時代を反映させるもののひとつとして、コロナ等の取組ときちっと記載していたほうがいいのではないかとということを含めて。この時代、こういったことが対応を迫られたということも必要というご意見である。

(構成員)

もう一つ資料の右側に出てくると思われるが、認知症のケアパスの問題、あるいはそれに伴う予防的なものから入院あるいは施設のケア、認知症全体を通しての連携の問題、これまで大きな話題になってきたし、ニーズが高かった。継続的な課題でもあるので、そのあたりの位置づけ、具体的にどう書くのかということも少し整理しておいて欲しい。

(代表)

総合的認知症対策推進の中でももう少し具体的な方法等を含めて提示するべきではないかということか。項目としてはここでよいか。

(構成員)

そこがいいかとは思いますが、ただ、後の方で書くというやり方もあると思うし、それは全体の書きぶり等での話。

(構成員)

若年性認知症については、大きな会社は産業医の医師が月に1回来ているので、企業に対してそれなりの啓発も必要ではないか。

(構成員)

今回は、いきいき長寿プランを作成する会議であり、個別の分に関してはすべてオレンジプランの方で記載している。整合性や、整理が必要。

(代表)

調整会議は、各分野別会議の間に開催されるため、調整会議でどのようなことが話されたかというのは、事務局が分野別会議の中で説明していただけたらと思うが、その中で、今日参加している構成員は、それを吸い上げて、また反映していかないといけない。いろいろな意見が出されたと思う。最後に事務局から連絡事項があれば。

(事務局)

今後のスケジュールについて。10月末から11月上旬にかけて分野別会議を開催し、分野別会議を踏まえ、第2回調整会議を11月中旬頃をめどに開催したい。

(代表)

他になれば時間になったので、これで調整会議を閉会とする。